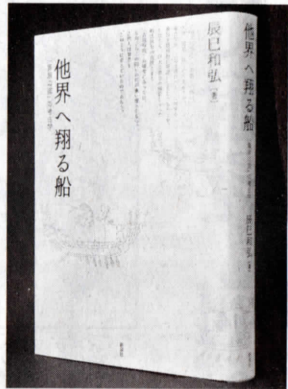


評・三浦 佑之 (古代文学研究者)
立正大教授

生前の行動によって天国か地獄かが決まるといふなら、まだ我慢もできよう。しかし、誰もが皆、古事記に語られるような暗くて辛気臭い黄泉の国に往くのだとすると、おちおち死んでなどいられない。別の他界はなかったのか。

近年の発掘成果を参照すると、海の彼方にも他界はあったらしい。古代人たちは、船の形をした木棺を海に向けて洞窟に並べたり、古墳に埋納する棺を船の形に設えたりする。あるいは石室の壁や土器にはゴンドラ風の船を描き、粘土で作った大きな船形埴輪を墳丘の裾に飾る。海鳥を胸に抱いた死者がいたり、棺の下に

古代人の魂を乗せて



◇たつみ・かずひろ=1946年、大阪市生まれ。同志社大元教授・考古学。『聖樹と古代大和の王宮』など。

辰巳和弘著 新泉社 3500円

他界へ翔る船 「黄泉の国」の考古学

海の砂を敷きつめている場合もある。

鏡や玉だけではなく、死者たちはさまざまに飾られてあの世へと向かった。その葬法や副葬品から、古代人が想像した死後世界を復元するかどうかということになるか。ぜひ知りたいが、考古学者は発掘と編年を最優先させるせいか、慎重すぎるせいか、出土した遺跡や遺物を深く読み込み分析しようとする研究は意外と少ない。

そのなかで例外的な存在とも言える著者は、ゆたかな想像力をはたらかせ、説得力のある論理を駆使して、遺物の背後にひそむ古代の人々の生きてある心を浮かびあがらせてゆく。

首長権継承の場とされる前方後円墳を、神仙思想を背景にもつ他界であり、その形は神仙世界への入り口となる「壺」を模していると著者は言う。死者の魂は船に乗って、馬に乗って、鳥となって他界へと向かう。その時、儀礼の場に置かれた船形埴輪には、朽ちて遺らない有機質の木や布で作られた櫓や旗が、華やかに飾られる。そう説明されると、死後世界のイメージも変わるし、葬送の風景も光を帯びる。

本書は、15年前に出た新書に近年の発掘成果を加えた「舟葬」論の決定版である。少々むずかしそうにみえるが、たくさんの図版や写真にも助けられ、破綻のない推理小説を読むように夢中になって楽しめる一冊になっている。